

二〇二二年度 入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二限国語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。



○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

古代や中世とはちがって、人権思想が流布した現代世界である。物理的強制移動はどういつても、やはりすくなくなつた。だがそれは、世界各国が「民主化」したからではない。人権思想が根づいて、明るい社会が到来したからでもない。

じつは、もうあまりその必要がなくなつたからだ。物理的強制移動にかわつて、ほくたちの「生や生活の場所の強制移動」が行われるようになったからである。生存活動それ自体の強制移動が、静かに目にみえない仕方で行われ、その目に見えない強制執行こそが、現代という時代の本質をかたちづくっている。

^(a) 目には見えない強制移住とは、^(b) 今この現在を立て続けに篡奪し、つねにへいつかどこかへとほくたちを追いやる強制移住のことである。ひらたくいえば、生活する場所がもう、今この局所的時空ではなくなつた、ということである。

たとえば、新聞紙面、TVやケータイやパソコンなどの情報機器がつくりだすヴァーチャル情報世界。全国津々浦々で、朝となく昼となく、意識の中スウは、そこに想いを吸い取られて、日常生活が展開する。あるいは、成果追求競争のこの時代である。明日や来年の計画だとか先行きへの心慮や不安だとか、昨年の成果やその反省や悔恨だとか、後にくる時間や時代への予測や期待や責任などなど。へ今こころではないへいつかどこかへの観念や表象や感情がつくりあげる、一大ヴァーチャル・ワールドのなかで生きるよう、いやでもいつのまにか強いられてしまつてゐる。

ほくたち現代人が生存する場所。意識をそこにかたむけたり、伎倆が工夫をこらしたり、成果を期待したり、計算したり、ものごとを配慮したり加工している場所。だからほくたちの生がそこにつなぎ止められている所。それはもう、基本的に今このリアルな現在時ではないということである。局的でとりかえようもない「いま」や「ここ」ではなくなつてゐる。ほくたちはつねに、へいつかどこかという超越的な場所で、時間を消費し生きるよう強制移動させられている。今こころではないへいつかどこかを第一次的な関心の的とする超越的生活形式のなかで生きることが、つまり生の純粹形をあえて生きないというエトスが、慣行になつてゐるということである。

注1

当然、「身近な場所や身近な人たちと今ここで愉快に共に生きる生活形式」は、すっかり価値をなくし、「僻地化^{へきち}」し、大半の人の人生の視野から省略されてしまった。それが、「新しい強制移住」である。

生存次元が二重化した。そういつていいかもしれない。生身が現に生きている生存の次元がある。今ここに生起するともリアルな、それはできごとだ。時々刻々と変異し生滅する、まさにリアル・ワールド。そこでぼくたちは生まれ、いずれそこで死んでいく場所だから、生の純粹形が息吹くピュアな場所だといわなければなるまい。

だが現代生活は、そんなリアル・ワールドへの帰属を希薄にする。同期の仲間より少しでも早く昇進しようと、あれこれ上司に媚を売るサラリーマン。子供が塾や学校などでご近所に負けないために、懸命に頑張る母親。少しでも他人を出し抜こうと、頻繁に車線を変更するドライバー達など。毎日、ぼくたちは知らないうちに、他人との勝負にいやでも参加してしまう。昇進や成長といった^イいつかどこかにまつわる要素や次元が輻輳^イしてつくりあげる遠^イカクなヴァーチャル・ワールドへ、感情も思考も願望も夢もすっかり没入してしまっている。「近さ」としてのリアル・ワールドは、「遠さ」としてのヴァーチャル・ワールドへ換算され、近さの世界それ自体がすっかり「立場」を失っている。

むろん、だれもわかつてはいない。企業のトップに昇りつめることができるのはほんの一握りだし、万事は実力や努力より運が決め手になることも。我が子は、優秀な学校でトップになっても、自分同様、この子が人生の真の意味に気づくわけでないことを。何台も追い抜いて爆走していったドライバーも結局、おなじ所で信号を待っていることも。

さらにわかっている。趣味に没頭したり、家族と一緒に過ごす、穏やかで静かな時間にこそ幸せがあることを。蕪雜^{ぶざつ}な競争に人生を浪費している今も、公園では四季折々の花が咲き、真つ赤な大きな夕陽がゆったりと海に落ちゆくことを。この瞬間にも、多くの幸せが、本当はぼくたちを待ちわびていることを。いずれ死に逝くさだめにあるのだから、他人との競争に参加している暇なんか、本当はないことも。

そんなことなら、十分に分かっているはずだ。でも分かっているでも、なにかに追い立てられるように、今この近さの世界を抹消し、遠くへ遙かへ向かって競ってしまおう。

いつの時代もそうだったかもしれない。「明日を思いわずらうなかれ」。そんな教えが二千年前にもあつたくらいだから、先
行き不安は人類の友達。社会生活を営むとは、そもそもがそんなもの。そう言い放つことも可能ではある。

だがそうだとして、この時代は、明日を思いわずらう度合いが極端にすぎる、というより「この日」を亡失する瞬間抹消の度
合いが激しすぎる。街角に佇めばわかる。ほとんどだれも、この時この場にはいないかのようだ。だから「表―情」がない。まるで亡霊か幽霊のようだ。

どうしてこんなことになるのか。当然、へ今ここに佇んで生きることを拒絶し、へいつかどこかへ強制移住させている強力
なパワーが、密かに働いているからである。

今このリアルな生から引き離し、今ここにしっかりと足を降ろすような態度を根こぎにし、「先へ先へ走らせ、追い立てる
強制力」。それを、^{注2}ヴェイリリオは「速度」とカン破し、速度によって、国家も社会も組織も個人の生活もすっかり背後であやつ
られ、駆動されつきうごかされている社会構造のことを、「ドロモロジ」と名づけた。

ドロモロジとは、ギリシア語のドロモスとロゴスの合成語。「前進、進行、競争、逃走」を意味するドロモスに、ロゴス（原
理・論理・体制・術）がくつついた言葉だ。だからドロモロジとは、へ今ここではないへいつかどこかの前方へ競わせ走ら
せ、追い立てる原理ということになる。

単にスピードや効率を求める論理や技法というだけではない。今ここというローカルな時空からぼくたちを追い出し、へい
つかどこかの未来へ向け競って走るよう強いる、不気味な強制力である。そしてそのようにして、マクロ的には社会や政治
や国家を、ミクロ的には個人の生き方や暮らし方を、その内部深くから左右し規制し、つきうごかしている根本構造（哲学で
は「超越論的制約」という）のことである。

だから、狭い意味での技術や戦術、あるいは社会の有り様とか、社会のしくみも、経済の動きも、国家や政治の在り方も、
個人の日々の生活といったものをも、みえない根底で貫通して、そうしたものたらしめている根源の駆動力のようなもの。そ
う考えていい。

たとえば、ローマ帝国が世界を支配できたのは、道路を制圧し、「すべての道はローマに通ず」、最速の戦車をもったからだ
が、それと同様、現代でもまた速度がすべて。戦争は情報戦争と化し、より高速高密度の情報握った者が勝者となる。新製
品や最速株式情報、企業の命運を決する。まさに速い者勝ちの社会である。

そもそも戦争自体が、「速度」のためにおこる。かつて、富と蓄積、敵対や憎悪といった観点から分析されるのが常だったが、
じつはそんなことのために戦争は起こらない。ドロモロジという構造原理があるため、個人や国家や集団は、いやでも敵味
方の役割に割り振られ、競わされその結果、戦争になる。前方を夢見、そこへ競って速くつこうとする権力意志が、敵をつく
り、味方をつくりだす。時間的な「前方」を獲得するためにこそ戦争するというわけだ。 A 逆ではない。

ようするに、速くなければ「富」にありつけないよう、社会も組織も国家もできあがっていることである。その速度を
可能にするのが、なによりテクノロジー。であるがゆえ、高度産業社会も、そこで糧(富)をえざるをえぬほくたちも、こうも
高速活動を実現してくれる科学技術を欲し、科学技術製品のさらなる進化(スピードアップ)を願ってしまう。その願いの果て
が、こうも慌ただしい現代人の日常生活という次第である。

つまりドロモロジとは、現代のウルチマ・ラチオ(神にも等しい究極根拠)のことだ。そのタメに、それユエに、何事も成
立してくる根本構造のことである。その意味で、^{注3}ハイデガーが、科学技術の「本質」として^{注4}テキ出したゲシュテルと、同じ事柄
だといつていいだろう。

(古東哲名著『瞬間を生きる哲学』より。ただし原文の一部を変更してある。)

注1 人間の持続的な習慣・行動、および、その規範。

注2 二〇〜二一世紀フランスの思想家。

注3 二〇世紀ドイツの哲学者。

注4 「世界の組み立てられ方」を意味する哲学用語。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナの部分にふさわしい漢字と同じ漢字を含む文を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 ジク足を移す。

2 スウ高な理想を抱く。

(ア) 中スウ 3 スウ奇な運命をたどる。

4 スウ要な位置を占める。

5 カン線道路が開通する。

1 一線をカクする。

2 間カクを詰める。

(イ) 遠カク 3 事業をカク大する。

4 母校の沿カクを知る。

5 カク段の違いがある。

1 会計カン査を行う。

2 初志をカン徹する。

(ウ) カン破 3 店のカン板を下ろす。

4 美術品をカン定する。

5 傍カン者に過ぎない。

- (エ) テキ出
- 1 予言がテキ中する。
 - 2 病院で点テキを打つ。
 - 3 悠々自テキの生活を送る。
 - 4 運転手が警テキをならす。
 - 5 違反者のテキ発に乗り出す。

問二 傍線部(1)、(2)の意味として最も適切なものを、つぎの各群の1〜5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- (1) 輻輳
- 1 並行して進む。
 - 2 何度も繰り返す。
 - 3 複雑に絡み合う。
 - 4 方々から集まる。
 - 5 互いに協力する。

- (2) 次第
- 1 経緯
 - 2 結果
 - 3 結論
 - 4 話の落ち
 - 5 現在の状況

問三 傍線部(a)「目には見えない強制移住」の内容として適切なものを、つぎの1～5の中からすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 超越的生活形式が習慣になってしまうこと。
- 2 戦争によって生まれ育った土地を追われ、難民のような暮らしを余儀なくされること。
- 3 世界中の企業が、成果を上げるために、最新の情報技術を使った情報戦争に突入すること。
- 4 街頭を行き交う人々の顔に人としての表情がなく、まるで亡霊のようであることに気づかされること。
- 5 対人関係の煩わしさから家に引きこもり、長時間テレビゲームに没頭するような生活になってしまうこと。

問四 傍線部(b)「今ここ」とは異なる内容を指しているものを、つぎの本文中の言葉1～6の中からすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 生存次元
- 2 ピュアな場所
- 3 ローカルな時空
- 4 へいつかどこか
- 5 リアル・ワールド
- 6 ぼくたち現代人が生存する場所

問五 傍線部(C)「どうしてこんなことになるのか」への答えとして最も適切な内容を含むものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 現代社会では速さや効率心がから求められているから。
- 2 現代社会が速度を生み出すように組み立てられているから。
- 3 純粋な生を生きることには思いもよらないリスクがあるから。
- 4 はるか昔からずっと人間は未来を不安に思う存在であったから。
- 5 人間が昔から敵と競い勝利することに喜びを見いだしてきたから。

問六 本文中の空欄

| |
|---|
| A |
|---|

 に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 戦争が速度の原因である。
- 2 戦争が権力意志の原因である。
- 3 ドロモロジーが戦争を引き起こす。
- 4 富が戦争を引き起こすわけではない。
- 5 速度がドロモロジーを作り出している。

問七 本文中での筆者の主張と合致する内容の文章を、つぎの1〜8の中からすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 現在では物理的強制移住も目に見えないところで執行されている。
- 2 わたしたち現代人は純粋な生を生きることがほとんどない亡霊のような存在である。
- 3 現代人は内部から根源的な力に突き動かされながら、しかも、そのことにまったく無自覚である。
- 4 未来に向かって競い合ってしまうような歴史上未曾有の状況が科学技術によって現代に出現した。
- 5 昇進や成功といった人々の目標も、所詮はテレビゲームのヴァーチャル・リアリティと同じものに過ぎない。
- 6 既に現代人は、情報技術によって生み出されたヴァーチャルな世界を中心に生きていくような存在になってしまっている。
- 7 現代社会を今のような形にしたのは、人々を駆り立てて止まない何かであり、それを神のような存在であると言ってもよいだろう。
- 8 この世に生まれた幸せを今この場所で生き生きと味わうためにも、今すぐ無意味な競争をやめて、強制移住に対し自覚的になることが何よりも大切である。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

老師の庵が見えるところまで来て、少年は立ち止まっていた。

「今夜、師に会ってよいものか。ぼくの考えていることは、恥ずかしい、くだらない、馬鹿馬鹿しいことばかりだ。だが、他にこのことを尋ねられる人がいない。おそろく、^(a)それを尋ねる者の気持ちに同情してくれる人も、老師以外、ぼくにはいない」

少年はそう迷いながら庵の扉を押した。すると目の前に老師は立っていた。

「友よ。いそいだのか」

「師よ」

「友よ。坐ろう。心を静めよう」

「師よ。ぼくの知りたいことは、恥ずかしい、くだらない、馬鹿馬鹿しいことばかりです。でも、それを師に質問しないではいられないのです」

「もうよい。ここでそれは言わなくてもよいのだ」

少年はしばらく黙った。そして小さいけれど強い声で短く言った。

「ぼくは誰ですか」

「なぜそれを知りたいのだ」

「でも、師よ、ぼくはぼくなのに、^(b)ぼくではないのです！」

「それで何か困るのか？」

師は空色の瞳^Aで少年を包むように見た。

「しかし、師よ……」

「友よ。君の言うとおりに、その問いはくだらない。だが、人は身を切るようにせつなくそれを思う」
少年はただ聞いていた。

「君は会ったこともない人を捜し出すことができるか」

「できません」

「ならば、君が知りたいことを知ることはできない」

「わかりません、師よ」

「『ぼくはぼくなのに、ぼくではない』と、君は言った。その問いで、君は何を知りたいのだ」

「師よ、本当の自分です。本当の自分が知りたいのです。今のぼくはぼくではない！ 人々の中で、人々の前で、求められるように振る舞い、そうあるべきように振る舞うぼくは、ぼくではない！ それは仮の、嘘のぼくなんだ!!」

「そうだろう、そう言いたいのだろう」

師は、懐かしいものを見るように微笑んだ。

「君は『本当の自分』ではない。だから、『本当の自分』はわからない。だから、本当の自分を永遠に知ることはできない。会ったことのない人はさがせない」

「しかし、しかし、師よ。世には、それを教えると言う人がいます。それを知的手段があると言う人がいます」

「間違っているのだ。間違っているのだ、友よ」

「何がですか」

「彼らは、問い方を間違えている。彼らは**私**という言葉を知らない」

「違います、師よ。これは言葉の問題ではない。今ここにいる、このぼくの問題でしょう！」

「違う。もしそうなら、今ここにいる自分がそれほどはっきりとわかるなら、君は『本当の自分』を問わないだろう。本当に問題なのは、『本当の自分』を知ることではない。君が『本当の自分』を苦しいほど知りたいと思う、そのことだ」

「わからない。わかりません」

「人はみな、当たり前前に『私』と言う。しかし、この言葉は何を意味しているのか？ 友よ、君もまた簡単に『ぼく』と言う。それは何を指しているのか？」

「それは……」

「何だ」

「……」

「体か？」

「いいえ」

「心か」

「そうかもしれませんが」

「いつの心か」

「今のです」

「今はもう過ぎた。過去の心はすでにない。未来の心はまだない。そして、過去の心と今の心と未来の心が、同じ『ぼく』の心だと、なぜ言えるのか」

「では、なぜ、ぼくはいつでもぼくなのでしょうか」

「人は思う。かわらぬ『私』を支える何か確かなものがあるはずだ、と。だが、それは、どのようにしても見つけれられない。なぜなら、『私』という言葉は、確かな内容を持つ言葉ではなく、ただある位置、ある場所を指すにすぎない」

「その場所はどこですか」

「『あなた』や『彼』ではないところ、『いま、ここ』だ。『私』はそこに付いた印なのだ」

「それだけのこと？」

「それだけだ。その場所に人は経験を集め、積み上げ、それを物語る」

「物語る？」

「集められ、整理され、まとめられる。それが言葉を持つ人間というものの在り方なのだ。『私』という名前の物語を作らなければならぬ」

「師よ、では、だれが整理するのですか、だれが『私』を物語るのですか」

「少なくとも、それは『私』ではない」

「師よ、誰かいるはずでしょう！　それが『本当のぼく』でしょう！」

「違うのだ。友よ。もし『本当の私』があるとなれば、それは『私』という物語を作らせる病、としか言えない。あるいは、『あなた』や『彼』と共にいる中で経験される、『嘘の私』へのいらだちとしか言えない。『ぼくは本当のぼくではない』と君は言う。

人にそう言わせる、このキ裂、この裂け目、この痛みとしか言えない」

「では、『本当の自分』をさがす人はただ愚かなだけですか？」

「そうだ。しかし、愚かさ^(d)でしか開けない道もある」

師はふいに少年の肩に手をおいた。

「君はいまここで、私と話をしている。それが本当の君であろうと嘘の君であろうと、君なのだ。我々二人にとって、それで十分だ。そして、そのこと以外に、我々の頼りになるものはない」

少年は灰色に光る老師の瞳を見た。

「友よ。『本当の』と名のつくものは、どれも決して見つからない。それは『今ここにること』のいらだちに過ぎない。苦しみにすぎない。『本当の何か』は、見つかったとたんに『嘘』になる。またいらだちが、還ってくる。もし、『本当の何か』が見つかったとすれば、それはどれもこれもすべて、あるとき、ある場合に、人の都合でとりあえず決めた約束事にすぎない」

老師の低い声は少し強くなった。

「友よ。『本当』を問うな。今ここにあるものが、どのようなにあるのか、どのようなにあるべきなのかを聞え」

「師よ、どう問うたらいいのでしょうか。ぼくにはそれがわからない、そこそそがわからないのです！」

「君は扉の前まで来た。中に入りたければ入るがよい。しかし、それは今夜ではない」

「師よ。また扉を開けに来ます」

少年は立ち上がると、静かに頭を(イ)タレ、庵を出て行った。

「師よ。お休みの支(ウ)タクができました」

部屋の暗がりで少年が出て行くのを待っていた少女が老師に声をかけた。

「いささか疲れたな」

「彼が今度来たらお断りしますか」

「また来るだけだ。愚かさは繰り返す。繰り返している内に、愚かさに気がつくときもある。そこからしか出ない知恵があるのだ」

(南直哉著『老師と少年』より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文章を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 キグの念を抱く。

2 キッコウの模様に染め上げる。

(ア) キ裂 |

3 キンキ地方を旅する。

4 仏道にキエする。

5 事実は小説よりもキなり。

1 候補者をスイセンする。

2 ダラクした生活を送る。

(イ) タれ |

3 タイダな性格を注意される。

4 誰にとつてもスイゼンの的。

5 犯罪はミスイに終わった。

1 門限破りは御ハットである。

2 タクチを造成する。

(ウ) 支タク |

3 シンタク銀行に預金した。

4 ドトウの攻撃をしのいだ。

5 彼は、タツケンに富む人だ。

問二 傍線部(a)「それを尋ねる者の気持ち」の内容として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解

答欄にマークせよ。

- 1 恥ずかしさのあまり、師と会わずに逃げ出したくなるような気持ち。
- 2 他の人とは異なる質問をすることができるといふ誇らしげな気持ち。
- 3 たとえ無意味でも、質問せずにはいられない切羽詰まった気持ち。
- 4 自分の愚かさ加減につくづく嫌気が差すような気持ち。
- 5 師を心から尊敬し、どこまでも慕う、せつない気持ち。

問三 傍線部(b)「ほく」の内容として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 馬鹿馬鹿しいことばかりを考えてしまう愚かさ。
- 2 人々の前で、求められるように振る舞う自分。
- 3 ある手段によつて初めて見えてくる姿。
- 4 変わることなく「私」を支えている確かなもの。
- 5 「私」という名前の物語。

問四 傍線部(c)「私」の内容として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 「いま、ここ」に付けられた、確かな内容を持たない印。
- 2 自分とは誰かと身を切るように問うせない思い。
- 3 過去・現在・未来を貫いて変わることなく存在する心。
- 4 「私」の名のもとに、経験を集め、整理する「本当の私」。
- 5 会ったことがないため、永遠に知ることのできない人。

問五 傍線部(d)「愚かさ」の内容として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 人々とともにいて、求められるように、あるべきように振る舞ってしまうこと。
- 2 「いま、ここ」の自分を嘘の自分と捉え、そのままを受け入れられないこと。
- 3 教えてくれる人がいるのに信用せず、自力で答えを見つけようとすること。
- 4 自分の問題を言葉の問題と捉え、「私」という名前の物語を作ってしまうこと。
- 5 「私」が指しているものの中に、体を含めず、「私」とは心だけだと思いつくこと。

問六 傍線部A「空色の瞳」から傍線部B「灰色に光る老師の瞳」へと変化した理由として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 少年が理解できないことに対するあきらめが瞳に表れたから。
- 2 少年の気持ちに同情していたが、さらに哀れみの気持ちに変わったから。
- 3 少年の問いそのものが間違っているということを何とかわからせようとしたから。
- 4 少年の「本当の自分」を、少年より先に見つけることができたから。
- 5 少年に伝えるべきことを言い終えて、話を切り上げるときが来たから。

問七 つぎの中から、本文の内容と合致するものをすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 本当の自分を求めることは、いらだちの病であり、そこからの回復は、求めるのをあきらめることである。
- 2 人は、「今ここにあること」をそのまま受け止めずに嘘の自分と捉えてしまう。
- 3 少年の問いは少年期特有のものであり、成長するにつれて消失することが老師にはわかっている。
- 4 人は、本当の自分を地道に追い求め続けることによって、それとの裂け目を埋めていくことができる。
- 5 老師は、「ぼくは誰ですか」と必死に問う少年の姿に、かつての自分を見ている。
- 6 人は、言葉を持つ限り、「私」という名の物語を作らずにはいられない。
- 7 人は、自分の経験を「私」の名前のもとに集めて整理することで、本当の自分を作り上げていく。
- 8 今の自分が偽りの姿であることに気付いた者は、愚かさを回避することができる。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

俳句と時間の関係について、ときどき考える。

この庭の遅日の石のいつまでも 高浜虚子

は石庭で有名な京都の龍安寺での作。「遅日」は春の日永のこと。春の季題である。

この句の時間は三重構造である。一つは「いつまでも」という永遠イメージ。もう一つは「遅日」という春の季節感。そしてもう一つは、作者が今、石庭を見ているというその瞬間。

俳句は瞬時の情景を切り取りつつ、季節の推移を詠う。四季の巡りは、繰り返しつつ「永遠」につながる。

遅き日のつもりて遠きむかしかな 与謝蕪村

朝顔の紺のかなたの月日かな 石田波郷

は「遅き日」「朝顔」という四季折々の現象の累積が永遠に到る、という観念を詠う。

麗しき春の七曜またはじまる 山口誓子

滝の上に水現れて落ちにけり 後藤夜半

去年今年貫く棒の如きもの 高浜虚子

繰り返す七曜。現れては落ちる滝の水。年の替り目を貫いてゆく棒のような時間。

これらの句は、繰り返す現象の一断面を詠いつつ、繰り返しの彼方にある永遠を想起させる。

俳句は五七五の短い詩なので、自ずと瞬時の風景を詠むことになる。しかし「瞬時」とは永遠の中の瞬時であり、逆に、瞬時の累積は永遠である。このような **A** な時間意識は、絶えず、俳句の根底にある。瞬時と永遠との間に、ある意味、中途半端にあるのが人間の時間である。四季のある風土に生まれた日本人は、季節の推移を身近に感じながら、成長し、年老いる。青春(思春期)あるいは人生の秋(思秋期)のように、人のライフステージは、しばしば季節とのアナロジーで語られる。

人間の時間とは、昼と夜、潮の干満、月の満ち欠け、四季の推移など、繰り返す自然界の時間に連動しつつ、加齢そして死という不可逆的な過程を辿る。巡回しつつ上昇あるいは下降するという意味では、人間の時間は **B** に似る。個人の束としての民族や国家を想起すれば、そこには歴史という、不可逆な時間の過程がある。

老いと死は、四季とともに、あるいは四季にかかわらず、運命として、あるいはセツ理として、人の身に訪れる。

私自身もうすぐ知命である。^(a)「年々歳々花相似たり。歳々々々人同じからず」というが、私が生涯に遭遇する春の回数は、未
来より過去の方が多くなってしまうた。

心中にひらく雪景また鬼景

赤尾兜子

これほどや寛が吐きし桜しべ

波多野爽波

いつまでも我燃ゆるなり大文字

田中裕明

これまでに私は、選者すなわち俳句の師と仰ぐ俳人との死別を三回経験した。

私が最初に師事した赤尾兜子は昭和五十六年、踏切で事故死した。享年五十六。そのとき私は大学生だった。

「心中にひらく雪景また鬼景」は難解な句であるが、心象として浮かぶ雪景色はまた自分の死後の景でもある、という意味だ

と思われる。鬱病に悩んだ兜子の凄絶な心象を象徴する作品である。

兜子の死後、私は波多野爽波に師事したが、爽波は、平成三年に亡くなった。享年六十八。癌と知らないまま昏睡に陥った爽波は、死に対して身構えた俳句は一切残すことなく、最後まで軽妙な句を作り続けた。

爽波と死別したとき私は三十歳だった。その後しばらく師を持たなかったが、平成十二年に爽波門の兄弟子である田中裕明が俳誌を主宰すると、その選を仰いだ。裕明は私より一歳年上で、その才能と人物を私は心から尊敬していた。その裕明が平成十六年に亡くなった。享年四十五。「いつまでも我燃ゆるなり大文字」は京大病院入院中の作。白血病と闘った天才肌の俳人の覚悟が窺われる作品である。

兜子の事故を新聞で知ったのは、早春の旅先であった。枚方に住んでいた爽波の葬儀はひらかたパークの菊人形の頃であった。裕明の葬儀のために大阪に駆け付けたのは、寒い年明けであった。

親しく師事した俳人との死別の記憶もまた、私の中では特定の季節と結びついている。

虚子の忌を明日にぞくぞく海の星 波多野爽波

波多野爽波は高浜虚子門であった。昭和三十四年四月八日、八十五歳で亡くなった虚子の命日が虚子忌である。同年四月一日に脳溢血で意識を失った虚子の最後の句が、三月三十日作の、

独り句の推敲をして遅き日を 高浜虚子

である。この句を残して虚子が世を去ったと思うと、句の推敲をする春の日永の時間が、そこで永遠に止まったようでもあり、また永遠に続いているようでもある。

虚子は、老いや死に対し何ら身構えることはなかった。日常の断面を無造作な一句に残し、この世から消え去った。
人間虚子の時間の終りは、「遅き日」という⁽²⁾駭蕩たる春の季題に包ヨウ⁽¹⁾されている。そのことは俳人として、また一個の人間^(b)としても非常に幸せな事例だと思われる。

(岸本尚毅著『俳句と時間』より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(ア)、(イ)のカタカナの部分にふさわしい漢字と同じ漢字を含む文を、つぎの各群の1~5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 配管のフセツ工事を実施する。

2 セツソクに事を運ぶ。

(ア) セツ理 3 栄養をセツシユする。

4 セツトク力のある理論だ。

5 セツゲン目標を達成する。

1 ヨウボウ魁偉な大男だ。

2 ジユウヨウな案件を処理する。

(イ) 包ヨウ 3 技能をヨウセイする。

4 川風が枝葉をユらす。

5 新しい方法をモチいる。

問二 本文中の空欄

A

に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 循環的

2 普遍的

3 重層的

4 連動的

5 刹那的

問三 本文中の空欄

B

に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 迷路

2 落葉

3 糸車

4 螺旋階段

5 連絡船

問四

傍線部(1)「アナロジー」の意味として、最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

クセよ。

1 対極

2 同一

3 連続

4 類似

5 皮肉

問五

傍線部(2)「駘蕩たる」の意味として、最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

せよ。

1 のびのびとした

2 緩慢な

3 生き生きとした

4 圧倒的な

5 やわらかな

問六 傍線部(a)「年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず」の内容説明として、最も適切なものを、つぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 毎年変わらず花が咲くように、人も変わらずにいらればよいのだが、お互いの違いばかりが目立ってくる。
- 2 年々咲く花の数が増えていくように、人は年々成長をとげていく。
- 3 毎年咲き誇る花々は、どれも同じように見えるが、一つとして同じ花はない。人も同じである。
- 4 花というものは時がたつにつれて、似通ってくるものであるが、人はその逆であり、個性ばかりが際立ってくる。
- 5 花々は毎年変わることなく咲くが、それを見る人は年ごとに変わってしまう。

問七 傍線部(b)「そのことは俳人として、また一個の人間としても非常に幸せな事例だと思われる」の説明として最も適切なものを、つぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 完成と完結を求めた末に、見事な辞世の句でしめくくったから。
- 2 並外れた強靱な精神を持って、目の死と敢然と向き合うことができたから。
- 3 繰り返す日常の一断面を詠いつつ、何ら身構えることなく死を迎えることができたから。
- 4 死という究極の虚無を見据えて、辞世の句の中に永遠の生を表現することに成功したから。
- 5 透徹した自己客観化の末に、生への執着と真つ向から対峙することができたから。

問八 次の文章を読んで、空欄（イ）～（ハ）に入る最も適切な人名をA群の1～6から、空欄（a）～（c）に入る最も適切な語句をB群の1～6からそれぞれ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

（a）の著者である正岡子規は、それまでの旧派の俳句を否定し、（イ）よりも（ロ）を重視し、空想よりも写実を重んじる新しい俳句の姿を明らかにした。その高弟の一人である高浜虚子は、俳誌（b）の編集に深くかわり、俳句を客観写生を重んじる花鳥諷詠の文学と位置づけた。（b）の有力な俳人であった（ハ）は、叙情性をより重視して虚子の客観写生と対立し、「自然の真と文芸上の真」を（c）に発表して（b）から離れた。

- | | | | | | | |
|----|---|--------|---|-------|---|--------|
| A群 | 1 | 水原秋桜子 | 2 | 二葉亭四迷 | 3 | 与謝蕪村 |
| | 4 | 松尾芭蕉 | 5 | 河東碧梧桐 | 6 | 小林一茶 |
| B群 | 1 | 馬酔木 | 2 | アララギ | 3 | 瀬祭書屋俳話 |
| | 4 | 野ざらし紀行 | 5 | ホトトギス | 6 | 奥の細道 |